
紅の夜

臨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の夜

【Zコード】

Z8497X

【作者名】

臨

【あらすじ】

真田琥珀

「よく普通のなんのとりえも無い小学4年生。

転入してきた臨と出会い、琥珀の運命は狂っていく . . .

白雪
臨

琥珀のクラスに転入してきた美しい少女。

深い謎と悲しい過去を、琥珀達に隠している . . .

夜鷹悠
よだかわう

琥珀のクラスメートで、普段は明るく陽気な少年。
琥珀達は知らない秘密を持つている . . .

高瀬春戸
たかせはると

琥珀のクラスメート。

悠にあることを言われ、どんどん成長していく . . .

石井海斗
いしいかいと

琥珀のクラスメート。

昔、異次元の世界で、忍をやっていた少しお馬鹿な少年。

金井芽衣
かないめい

琥珀のクラスメート。

才能はないが、夢に向かつて進んでいく . . .

ある夢から始まる、能力者と妖怪と悪魔と神の、時と真実を巡る物語。

～序章～（前書き）

この物語の主人公、真田琥珀が見た夢。

その夢に出てきた少女に瓜二つの転入生。

琥珀と臨の出会い。

臨と出会ったことによつて、琥珀の運命の歯車は回ります。 . . .

（序章）

（序章）

「そこは、今の人間から見たら、異次元の世界……」

荒れ狂う化物。醜い雄叫び。

今、狂っているこの世界は……。「妖界」。

様々な妖怪の住家。妖怪の世界。

その中で、私は白い少女と共に白い女の人と男の人を見送られながら不思議な門をくぐろうとしていた……

「起きろ！琥珀ーーー！」

一階から弟の準が呼ぶ声がする。

ベットからあくびをしながら飛び降りた私は、先ほど見た夢を思い返した。

私は真田琥珀。平凡に暮らす、なんのとりえのない小学4年生。

そして、夢に出てきた少女……

あの白い少女……誰なの？そして、白い女の人に男の人……。

「琥珀ー？」今度はお母さんが私を呼んだ。

パジャマから、私服に着替えると、私は言った。

「今行くよー！」

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、生徒達は席に着く。

担任の吉岡先生が、教室に入り、いつもより緊張氣味に出席を取り始めた。

そして、私達が思つても見なかつたことを言つた。

今日は新しい転入生が来ています。

生徒はざわめいた。そんなことは、誰も耳にしていなかつたから。
そして教室に入つて来たのは . . .

夢に出てきたあの少女だった。

いや、あの少女にそつくりな女の子だった。

吉岡先生は女の子の紹介をした。

「今日から4—1に転入してくる、白雪臨さんです。
歯やん仲良くしてあげてね。」

そして、臨といふ少女は口を開いた。

「白雪臨です。よろしくおねがいします。」

臨は私の視線に気がついて、にっこりと微笑んだ。

これが私、琥珀と臨の出会いでした。

第一幕 転入生 第一章 謎の転入生（前書き）

謎の転入生白雪臨は、一体何者なのか。

学校案内の途中、臨に突然聞かれた質問に、琥珀はしどろもどろになる。

その質問の意味とは？

第一幕 転入生 第一章 謎の転入生

席に着いた臨は、早くも生徒達に囲まれた。

ねえどこから来たの？ 好きなタイプは？

など、様々な質問をされたが、臨は何も答えず、ただ微笑んでいた。

「ああ、席に着いて。授業始めるわよ。」

休み時間、臨は質問責めにされる前に、さっと教室を出て行つた。私は、臨を追つた。夢に出てきた白い少女は、髪も服も真っ白だつたけど、臨は、黒髪に、アジアンなティストな服を着ていた。でも、どことなく似ているのは顔だ。
少し細めの瞳に、シャープな眉。すつきりとした鼻に、きゅっとむすんだ口元。
絶世の美少女といつていいくらい顔立ちだった。

そんなことを考へているうちに、臨は角を曲がつた。
私は慌てて追つたが、臨が曲がったとおもわれる道には人影はなかつた。

『しまつた、見失つた！』

と思つたとき、背後から凛とした声が聞こえた。

「あら、どうしたの？ こんなところで。

もし、よかつたら、学校の中の案内してくれない？ 琥珀さん。」

臨は、微笑みながら、（いや、どこか意味ありげな笑い方だつたが）
言った。

「い・・・・・いいよ。」

しどりもどりになりながら私は答えた。

廊下を歩きながら私は臨の様子をうかがつた。
まだ、臨とはあまり話したことが無いから、臨がどんな子かがわ
らない。

しばらくすると、臨の方から私に話しかけてきた。

「琥珀さんは、靈つて見える？」

予想もしなかつた言葉に私は仰天した。

「あ・・・あの、白靈さ・・・。」

私の言葉は途中でせきりられた。

「臨でいいよ。」

臨に言われたので、私は訂正した。

「臨さん、私、靈感なんてないし・・・なんの能力もない・・・た
まに見えるつていう人もいるけど。」

「そうならいいわ。」

臨は、綺麗な黒髪を靡かせながら私より一步前に出た。

「私、ちょっと職員室寄るから琥珀さんは先に行つて。」

そうこうと、臨は角を曲がつて消えていった。

第一章 クラスマート（前書き）

クラスメートに囲まれた白雪臨は、
何も答えずただ微笑んでいる。
けれど、悠だけは、警戒心を抱く。
何故か。それは、この後の話に繋がっていく
・
・
・

第二章 クラスマート

一人取り残された私は、とぼとぼと教室に戻った。

「琥珀…どこに行つてたの?」

クラスメートの金井芽衣が私に飛びついてきた。

「えつ、何!何!?」

私がヒステリックに言つと、

「何つて…今日の休み時間、一緒にお絵かきする約束でしょー?」

芽衣はキーキー声で私に言つた。

「あつ、そだつた…~『めんね、芽衣~。』

両手を合わせて許してのポーズをとる私を、芽衣はあきれた顔で見
た。

『すっかり忘れてた!本当に『めんね~。』

「金井芽衣」 - 私のクラスメートの女の子。

明るくて、ムードメーカーだけど、

転入生、白雪臨には、少し警戒心を抱いている。

私はじつと臨を観察していた。

どうにも気になる臨は、まだ給食に一切口をつけていなかつた。

芽衣に話しかけられて少し目を離した。

またすぐ臨の方に目を向ければ

「えっ！？」

臨は、もう給食をかたずけていた。

『なんで？三分も喋つてないのに！…』

まわりもざわめいている。

全く不思議な少女だ . . . 私は更に少女に興味をそそられた。

いつたいなんなの？あの子！！

第三章 仲良しグループ（前書き）

謎の少女、臨。

何故か、悠を警戒しているような臨は

何を思うのか . . .

悠の何を感じたのか . . .

臨と悠の関係はこれから先重要だ。

第三章 仲良しグループ

いつたいなんなの、あの子！

臨は、皆の注目を浴びているにもかかわらず、むつむつと食器をかたづけた。

昼休み、臨は教室で読書をしていた。クラスの皆に話しかけられたら微笑みを返すだけで・・・。

そこに、クラスでも一際目立つ、夜鷹悠が臨に明るく話しかけた。

「ねえ、君どこから来たの？さっきから黙つてばかりだけど。」

悠は、いつもとは違つ、どこか邪悪な笑みを浮かべた。

読書をしていた臨は、他の皆には微笑んでいたが、悠にだけはしかめつ面をしていた。

まるで、悠を警戒しているかのように・・・。

芽衣は、春戸と海斗とお喋りをしている。

春戸は、無邪氣で男子なのに可愛らしげに顔をしているせいか、女子にとてもモテるのだ。

他の女子に囲まれながら、のんきにクラスメートは余談している姿は、どこか和める。

逆に、海斗は馬鹿だ。顔はそこそこなのに、頭がおかしい。

昔は忍だつたとか、実は300歳なんだとか、あるわけのないこと

を言つている。

金井芽衣、高瀬春戸、石井海斗、夜鷹悠、最後に私はいつも一緒にいる仲良しグループだ。

まさか、このグループが、臨の過去であんなことに巻き込まれるな

んて思つても見なかつた . . . 。

「ねえねえ . . . 」悠がしつこく臨に話しかけている。
もちろん臨はずっと無視しちばなしだ。
私は、バシッと悠の背中を叩いてやつた。

「臨ちゃん嫌がつてるでしょーやめてあげなさいよ。」

「こつてえなあ。わかつたよ。もみじの琥珀。」

『嘘、臨さんの前でそんなこと言わないでよー。』

私は、とても凶暴だ。男子には、気に入らない時はすぐ蹴りやパンチ、平手打ちを入れてしまう。

もちろんそれは、友達（人）のためだけれど、私が平手打ちしたときに、背中にもみじ型（手のあと）が残るので、通称もみじの琥珀と（男子には）呼ばれている。

「ありがとう。琥珀さん。」

突然礼を言われて驚いたが、私は顔を赤らめて呟つた。

「どういたしまして。」

第四章 紅色のケース（前書き）

琥珀が見つけた不思議なケース。

拾おうとしたが、悠に取られてしまった。

その時、一瞬見えた、「白雪臨」の名前、

花壇の裏で気付いた、悠がそのケースに似たものを持っていたこと。

このケースもあの事に繋がっていく . . .

第四章 紅色のケース

トイレの掃除が終わり、教室へ戻るうとしたら、廊下に紅色のケースが落ちていた。

不思議に思つて拾おうと近付こうとしたら、一足先に夜鷹悠がそのケースを拾つた。

その時一瞬ケースに「白雪臨」という文字が見えたので、私は急いで駆け寄つた。

「悠！それ、私に貸して！臨さんの物でしょ！」

「いや、違つ。俺が拾つたから、俺の物だ。」

悠は冷たく言つとさつとその場から消えた。

『えつ！嘘でしょ！悠が消えた！？』

私はショックで固まつてしまつた。のも束の間、チャイムが鳴つたので急いで教室へ戻つた。

教室に悠は居なかつた。また、白雪臨も居なかつた。

先生は、白雪臨は家の事情で帰つたが、悠は知らない。と言つた。では、悠はどこに居るんだろう。五時間目が終わつた後、私は教室を飛び出した。

悠が今どこで何をしているか突き止めるのだ。

彼方此方探して見つからないうちにチャイムは鳴つたが、私は気にせず走つた。

ついに悠を見つけた。裏庭の花壇の裏で、何かじいせうそやつている。何をやつているのかと覗くとしたら、

「琥珀、じんな所でなにやつてるんだ。」

冷たい声で名前を呼ばれた私はビクッとしながら答えた。

「なにして、悠ことなにやつてるのよ。わざわざ探しに来たつていうのに。」

言いながら、花壇の裏を覗いてみた。

一見、細かい字が書かれた紙がたくさん散らばっているだけに見えた。

悠が、さつとケースのなかにしまつてしまつたからよく分からなかつたが。

そういえば、悠のポケットには、真っ黒なケースが入っている。

それは、紅色のケースによく似ていた。

一体、このケースは何なのだろうか。

このケースに何か秘密が隠されているのは間違ひなかつた。

第五章 血滴る教室（前書き）

次回の章の続き。

悠と共に帰った教室に待ち受けていた悲劇。
血滴る教室。他の教室では、何事も無いかのように
授業を続けていた。

私達のクラスに一体何が？

そして、臨と悠は何をしたのか？

琥珀はこの状況で何を思うのか . . .

第五章 血滴る教室

悠を無理矢理引っ張つて教室に戻つた。
が、教室に入つて私は言葉を失つた。

他の教室には、何事も起こつてないのに、私の教室だけ・・・

荒らされ、血が飛び散つていた。

あちこちから響く悲鳴。

まるで、そこに見えない何かが居るかのように、次々生徒が倒れていく。

無事の生徒は皆固まつて震えていた。

私は咄嗟に臨の姿を探した。

臨は皆と少し離れてたところでその光景を見ていた。

いや、左手を胸の前で人差し指と中指を立てた状態でその光景を見ている。

よく見てみると、その生徒が固まっているところから離れている生徒が
次々と倒れていた。一体何故?

私がその場で凍り付いていると、悠はにやりと笑うと、
私の腕を噛んだ。

恐ろしい程強く噛まれ、血が滴る。

私ははつとした。

何!あれ!?

目の前に巨大な蜘蛛のような化物が居た。

「キヤー」

また甲高い悲鳴がした。

また一人、その化物に捕まつてしまつた。

私の腕から抜け出した悠は、その化物に突進していった。

「悠、危ない！！」

私は叫んで、目を伏せた。

けれど、何も起こらない。何も聞こえてこない。

目を少し開けてみると、教室には黒っぽい紫色の靄がかかっていた。

そして、化物の姿はどこにも無い。

一体何が起こっているの？

すると、今度は白い光が放たれた。

私は眩しくてまた目を閉じた。

その後頭を誰かに強く打たれ、私は気を失った。

第五章 血滴る教室（前書き）

先ほど起きたあの事件。

死者 計十二人とかなりの人が死んだ。
今までになかったことに日本どころか
世界中が騒ぎ出す . . .

第五章 血滴る教室

氣付いた時には、学校の広い保健室に居た。

『生徒 11人
教師 1人 死亡』 保険の先生は青い顔をして警察に通報していた。

担任の吉岡先生と、その他生徒11人死んだ・・・
私のクラスは34人居る。11人死んだということは、23人しか残っていないということだ。

それに、吉岡先生も死んでしまった。

本当に？何故、どうして！

私は信じられなかつた。どうして、皆死んでしまつたの！？
幸い、芽衣と春戸と海斗、そして、臨と悠・・・は無事だった。
「死」をまだ理解しきれなかつた私にとって、私はこの状況をパニックになつて逃げるしかない。

「とりあえず、生徒達を皆家へ帰しましょう。」

校長先生が震える声で言つた。
私達は家に帰された。

一週間学校閉鎖になつた。

もう、日本どころではなく、世界中にこの事件のことが知れ渡り、大きな衝撃を与えた。

テレビのニュースはこの話題でたくさん。

「不審者による大量虐殺か！？」

など、テレビではやつてゐるが、実際そんなことではない。

『化物に襲われたのだ。』

その化物がなんなのか、それは解らない。
でも、皆は化物に殺されたのだ。
そしてなにより . . .

悠と臨のことだ。

あの後何が起きた？

何故いきなり化物現れた？

それで何故突然消えた？

何故？私の頭の中にはその言葉でいっぱいだった。
校長先生達に外へは出るなと言っていたが、

私は気分転換に外へ出た。

しばらく歩いていると、後ろから声がした。

「あら、琥珀さんも散歩？ 奇遇ね。」

振り返るとそこに臨居た。

私は思い切つて聞いてみた。

「昨日のあれはなんなの？」

思い切つて聞いてみた。

臨の顔は真けんそのもので、私の視線から逃れるよつこ話しだした。
普通では考えられない、信じがたい話を . . .

第六章 化物の正体（前書き）

事件を起こした犯人は妖怪？！

夜鷹悠は危険な人・・・

臨の正体は陰陽師？

臨の話を聞いて、余計に混乱した琥珀。

臨に「陰陽師にならない？」と聞かれた琥珀は
一体どうする？！

第六章 化物の正体

臨が普通ではありえない信じがたい話を話し出した。まずは、こう前置きを言った。

『さつきいた化物のこと、覚えてたのね。生きていた人全員の記憶を消したはずなのに・・・あなたには、才能があるかもしないわ。』

「なんのこと?!」

記憶を消した？ 才能がある？

・・・でも、やっぱり化物は本当にいたのね？あれは一体なんなの？！」

『そうね・・・あれは、化物といえば化物だけど、詳しく述べと「妖怪」の方が

近いと思うわ。やはり、夜鷹という人は危ないわ・・・』

私は混乱した。妖怪？妖怪って、河童とか、一旦木綿とかの妖怪？それに、悠が危ない？それは、どういうことなの？

「妖怪って何？悠がどうしたって言ひの？」

『皆、さつきの事件を不審者のせいだと思い込んでるわ。私がそつさせたから。妖怪それは、まあ簡単に言つて怪物に等しいけれど、

何か違うのよね . . . でも、今は妖怪の話はおいて置きましょ
う。

夜鷹は、危ない。何か力を隠している。
闇の暗い、そして強い力を . . . 。』

「悠の、力？」

『ええ。

琥珀さんは、あの化物を目の前にして、どうした?』

「どうもひつも、怖くて何もできなかつた . . .
皆を助けられなかつた。臨さんは何をしてたの?
どうして、臨さん達は襲われてなかつたの?」

『そう . . . そうね、私は手短に言つと、陰陽師をやつてているの。
陰陽師とはなにか . . . それは、魔や妖怪を祓い、悪口などじを占
う、
そういう人達のことよ。だから、私は妖怪から人を守つていたの。
陰陽師は、普通の人とは違うことができるのよ。
例えば . . . 見ていて。』

臨はそういうと、すぐ後ろにあった電柱に向かつて手を突き出した。
すると、どうだろう。触れてもいないのに電柱が一つに圧し折れた。

「本当はこんなもんじゃないわ。」

臨はそういうながら、不思議な言葉を言つた。

電柱は、みるみるうちにもとに戻った。
啞然としている私に臨は微笑みかけた。

「話がずれちゃつたわね。
まあいいわ。琥珀さん、貴女この力身についてみない?
いいえ、平たく言えば、陰陽師にならない?」

私は大きく目を見開いた。

第七章 誘い（前書き）

臨に陰陽師にならない?と聞かれ、陰陽師になることを決意する。

これ以上大切な人を失いたくない . . .。

これから、特訓に励む毎日が始まる . . .。

第七章 誘い

臨に、陰陽師にならないか？と聞かれ、驚く私。

陰陽師つて何かもわからないし、妖怪なんて信じたくない。
でも、もし妖怪が本当に存在するならば、私はもう友達を失いたく
ない。

自分も、死にたくない。仲間を、自分を守りたい。

「よくわからないけど、私はもう、大切な人を失いたくない。
だから、皆を守る為、私は強くなりたい。

臨さん、私に力をちょうだい！」

私は言った。臨は満足気に笑うと、

「いいわ。私が貴女を鍛えてあげる。」

そう言って私の腕掴み、不気味な空き地へと引っ張つて行つた。
その空き地で、臨は言った。

「まず、貴女に結界を教えます。

結界とは、自分を守り、かつ、相手に攻撃できる便利な技。
結界をマスターするには、最初に九字を教えましょう。

私がやつてきた中で一番簡単な方法だから . . . 。」

そういうと、臨は人差し指と中指を立てた状態で手を組んだ。
そして、「臨」と言ひうと、何かゾワッとした。

「これが結界よ。きっと貴女にもこれができるわ。

私に向かつて手を伸ばして。触れられないかい。」

私は臨に言われたとおり、手を伸ばした。

すると、コツツ何かにぶつかった。これがきっと結界なのだらう。田には見えないが、確かにそこに壁があった。

「これが……結界……。

私にも出来るの?」

「ええ。練習すれば、貴女もきっとできるはず。」

私は臨と同じよう、手を組んでみた。

そして、「臨」と書いてみたが、何も起こらない。

「やつぱり、一回田から出来たら化物か。」

臨は笑いながら、私に向かつて言った。

「これから毎日、休み時間と放課後特訓!」

いやはや、なかなか大変な事をやつぱじめてしまつたらしく。
『これから、私はどうすれば、いや、どうなつてしまつの?』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8497x/>

紅の夜

2011年11月17日19時12分発行